

## あなたはあたしのクリスマスツリーだったのよ

鷺沢萌『大統領のクリスマスツリー』

これがね、大統領のクリスマス・ツリー。治貴（はるき）の言葉は香子（きょうこ）の耳の奥に今でも残っている。ワシントンで出会い、そこで一緒に暮らし始めた2人。アメリカ人でも難関の司法試験（バー・エグザム）にパスし弁護士事務所（ロー・ファーム）でホープとなった治貴。2人の夢は次々と現実となっていく。だが、そんな幸福も束の間……。感涙のラストシーン！（講談社BOOK倶楽部「内容紹介」より転載）

もうすぐクリスマスです。12月にはいってすぐ、ネットでこんな記事を目にしました。

ワシントンのホワイトハウス南側にある広場で11月30日、巨大なクリスマスツリーに点灯する恒例のイベントが開かれた。バイデン大統領とジル夫人がカウントダウンすると、ツリー全体に施された電飾がともった。1923年のクーリッジ大統領から続く伝統行事で、米国は本格的なクリスマスシーズンに入る。（KYODO 12/1(木) 10:00配信）

この季節、世界中でクリスマスツリーを飾っているのですが、アメリカ合衆国大統領のクリスマスツリーはつとに有名。でもワシントンに行ったことのない僕にとっては、この話題が出る度に鷺沢萌さんの切ないラブストーリーを思い出してしまうのです。

ワシントンで出会い、恋に落ち、家族の反対を押し切って結婚した香子と治貴。アメリカで弁護士になって成功するという彼の夢を叶えるために、一心不乱に働いて家計を支え、頑張る香子。彼を支えているという自負心が彼女を支えます。疲れ、痩せてもなお、その自分の姿に「今の自分は綺麗だ」と思う香子。しかし、夢が現実になった時、二人はすれ違っていきます。

これがね、大統領のクリスマス・ツリー……。はじめて会った夜の治貴の声が、耳の底で鮮烈に甦る。そのあとふたりで一緒に何回となく見た光の数々。そのときそのときの光景を、香子は確実な自分の財産として思い返す。何も無い黒い木に、ひとつずつ灯りをともしてきたようなふたりの日々が、香子の呆然と見開かれた瞳の奥に映った。（中略）家を飛び出してこの町に舞い戻ってきた日。大騒ぎのパーティー。ささいなけんかで腹を立てた日。治貴が弁護士になれたとき。有香が生まれた日。家を買った日。……それらのひとつひとつが、何もなかったこの木を飾ってきたのだ。

この後、香子は「あなたはあたしのクリスマスツリーだったのよ」と言うのです。人生をともに過ごすことで飾り付けていったツリー。でも、二人のクリスマスは終わりを迎えます。問題はその終わり方をどうするかです。講談社文庫の解説で俵万智さんが、ラストのほんの一言二言の会話のためにすべての言葉は積み上げられていると評するほどのラストシーンを、ぜひ味わってほしいと思います。

ところで、みなさんのうちでは、クリスマスツリーはいつぐらいに出して、いつぐらいまで飾っているでしょうか？多分、お正月を迎える前に片付けてしまっている家庭が多いのではないかと思います。

ところが、僕がホームステイでお世話になったイギリスの家庭は、年を超えてもしばらく飾っていたのです。ホストマザーにいつ片付けるのか聞くと、「この日って決めていないの。でも新年を祝う時には華やかさがほしいでしょ。新年を迎えてもういいかなって時に片付けることにしてるの」と言っていました。イギリスでは新年を迎えるのはカウントダウンで盛り上がるのですが、1月2日は全く普通の日と同じ。いきなり日常に戻るのです。それでも家族と過ごしたクリスマスの楽しい余韻を少しでも長く楽しんで、そして最後にツリーをしまって踏み切りをつける、そんな感じでした。

ホストマザーが僕に「日本ではどうなの？」と聞くので、「早く片付けないと娘の結婚が遅れるんだ」と答えてしまって、すぐそれはひな祭りだったと訂正したのですが、うまく伝わらなかったようで、「ああ、それでうちの娘はまだ結婚しないんだ！」って笑っていました。

その後、合浦家はツリーはゆっくり片付けることになりましたが、ホストファミリーがどうなったかは不明です。

